

つどい

第 445 号
2025.11.1

発行・豊中歴史同好会
責任者 小川 滋

〈聖徳太子歿後一四〇〇年によせて〉

聖徳太子の実像を探る 下 塚口 義信

〈聖徳太子歿後一四〇〇年によせて〉

聖徳太子の実像を探る 下

堺女子短期大学名誉学長・名誉教授 塚口 義信

四 『日本書紀』と『隋書』の倭王

『書紀』の記事は疑われている状況ですが、幸いにも、推古朝のことを書いた歴史書が外国に存在しています。それは、『古事記』『日本書紀』よりも五、六十年ほど前の六五六年に成立した歴史書、魏徴（五八〇～六四三）らが撰した『隋書』です。この書は、七世紀前半の倭国（日本）のことをほぼ同時代に書いているので、その史料価値は高いと考えられています。この書のなかで日本のことについて書いている部分を、『隋

書』倭国伝といっています。一般には『隋書』倭国伝といわれていますが、実は、この言い方は正確ではありません。ではなぜ、『隋書』は「倭」と書くべきところを「倭」と書いているのでしょうか。文字の類似に基づく誤字説も捨て切れませんが、坂元義種氏は次のように説いておられます。中国唐代の学者裴駰（はいいん）が著した『史記集解』や司馬貞の『史記索隱』により、「倭」と「倭」はともに「ニ」と発音し、両字が同じ音であることから「倭」字が使用されたのではないかと。いずれにせよ、内容は倭国のこ

とについて書いていますので、ここでは従来通り、『隋書』倭国伝と記しておきます。さて、その『隋書』の開皇二十（推古天皇八・六〇〇）年の条に、「倭王あり。姓は阿毎、字は多利思比孤、阿輩（たかしひこ）鶏弥（あへけむ）と号す」とあります。これによると、推古朝当時の日本の王は多利思比孤と称していたことが分かります。ヒコは男性を示す名辞であり、さらに、「王の妻は鶏弥（けみ）と号す」とありますから、明らかに倭王は男性と認識されていました。ところが、『記』『紀』によれば当時の日本の最高リーダー（天皇）は女性（推古女帝）であって、この記事と合いません。さらに重要なことは、「その王、清（せい）（裴世清）と相見え、大いに悦んで曰く、とあり、大業四（推古天皇十六・六〇八）年に遣隋使の答礼として倭国に來た隋使はタリシヒコ（タ